

『地域実践研究』の発刊にあたって

松村暢彦*

少子高齢化や人口減少が進む中、地域社会の持続可能性が課題となっている。特に地方では、過疎化や経済の衰退が深刻化し、地域住民や多様な主体が協働する地域実践の重要性が高まっている。地域実践はプラグマティズムの視点から柔軟な対応と試行錯誤が求められる。地域実践の研究を評価するにあたって、新たに躍動性を取り入れる必要がある。『地域実践研究』を発展させていくためには、躍動性を評価しうる査読者を増やしていくことと多様な分野の論文が掲載されていくことが必要とされる。

Keywords：地域実践、プラグマティズム、躍動性、評価項目

1. 地域実践の特徴

近年、少子高齢化や人口減少が進み、地域社会の持続可能性が問われている。特に地方では、過疎化や経済の衰退、公共サービスの縮小などの課題が深刻化しており、地域住民や多様な主体が協働して課題解決に取り組む地域実践の重要性が高まっている。また、自然災害の頻発や気候変動の影響により、地域レベルでの防災・減災の取り組みが不可欠となっており、行政だけでなく、住民・企業・NPO が連携し、地域資源を活かしたまちづくりや環境保全、防災対策を推進することが求められる。このような社会状況の中、地域実践は単なるボランティア活動ではなく、持続可能な社会を築くための重要な手段として期待されている。

こうした地域実践の特徴は、理論や思想だけではなく、具体的な行動を伴う点にある。社会問題の理解だけではなく、実際に何をすべきかを考え、行動に移すことが求められる。そのためには、協力や対話を通じて、多様な価値観を尊重しながら活動を進めることが重要となる。現代社会において、個人の社会的責任が重視される中、地域実践はますます重要な役割を果たしており、一人ひとりが主体的に関わり、社会の課題解決に貢献することが、より良い社会を築くための鍵となる。

また、地域実践とプラグマティズムは、実践的な課題解決を重視する点で密接な関係がある。プラグマティズムは、知識や理論が実際の経験や行動を通じて意味を持つとする哲学であり、地域実践の場においても、その考え方が活かされる。プラグマティズムの観点からは、地域実践の成功は理論的な正しさよりも、具体的な問題を解決し、地域にとって有益な結果を生むことにある。特定の理論に固執するのではなく、実際の状況に応じた柔軟な対応が求められる。したがって、地域実践におけるプラグマティズムは、現場の経験から学び、試行錯誤を重ねながら、最適な解決策を見出していくプロセスを重視する点で極めて重要な考え方である。

こうした姿勢は大学教育におけるこれまでの専門的知の在り方に大きな課題を突きつけている。従来、大学で学ぶべき専門職の能力とは、道具的・機械的処理の可能な問題に対し、系統的でより科学化された知識を適用することであると見なされてきた。地域実践を大学教育に取り入れる意義として、地域の課題解決に取り組むことで、コミュニケーション能力や問題解決力、協働の姿勢など実践的なスキルが養われる点があることは間違いない。また、大学で学んだ系統的な理論を実社会の場で応用することで、その理論のより深い理解が促され、学問の意義を実感できるようになる点も重要である。しかし、それ以上に地域実践の経験を通して、特定の理論に固執するのではなく、状況に応じた柔軟な考え方、新たな専門分野へ自らを開いていくことをエンカレッジしている点にこそ最大の意義がある。つまり、このように地域実践を通じた教育活動は、理論と実践の統合を通じて学びを深化させるとともに、理論と実践の開放を通じて学生の学びの自主性を回復し、さらに学びを展開させる可能性があることに大きな意義があると考えられる。

*愛媛大学社会共創学部（Ehime University）

また、学術的には、地域実践は、社会学、教育学、計画学、人類学、公共政策学など多様な分野で議論され、地域コミュニティの形成、ガバナンス、住民のエンパワーメントなどの視点から分析されてきた。地域実践はアクションリサーチとも結びつき、研究者や実践者が協力しながら課題を特定し、実際に変革をもたらす手法として発展している。このように、地域実践は単なる実践的活動ではなく、各専門分野の理論的な枠組みの中で研究される重要な概念である。しかし、地域実践は体系化、精緻化よりも具体的な地域の課題解決に寄与できたかを志向する。勿論、体系化、精緻化していくことによって、別の地域のその専門分野の観点からの課題は解決することにもつながりうる。それとともに、先ほどの地域実践の持つ開放性を活かして、地域実践に新たな観点、専門分野からの学びと融合をエンカレッジすることによって、学術領域の蝸壺化を防ぎ、新たな学術領域を開拓できる可能性を持つ。

2. 地域実践研究の評価

このような地域実践研究をいかに評価するのかは困難を伴う。私の主な専門分野は都市計画学、土木計画学であるが、各学会の論文の評価項目は新規性、有用性、完成度、信頼度で、掲載可否を判断される。おそらく他の学問分野でも同じような基準を採用していることが多いのではないと思われる。このような基準を地域実践研究に採用した場合、地域ごとの社会・文化的背景やニーズが異なるため、同じ手法を用いても、ある地域では成功し、別の地域では成果が出ないことがあり、信頼度が低いと評価されることもあるだろう。また、地域実践は実践のプロセス自体に価値があるため、地域住民の主体的な関与や協働のプロセスを詳細に記述すると冗長で完成度が低いと見られることもある。そうすると査読付き論文としてではなく、報告として一段低いものとして扱われることになる。正直に言うと、筆者も地域実践を論文化するためにアンケートを取った経験がある。その際には、実践活動中の鮮やかな感動や多くの方々と共有した喜びを感じた自分自身を裏切ったような感覚に陥った。いわゆる手段の目的化であり、プラグマティズムの作法からはもっとも恥ずべき行為である。それが筆者だけならば、筆者の問題として片付ければよいが、どうも様々な学術領域に構造的に起こっており、それが学術の閉塞感につながっているように感じられる。

このような問題の根源には、論文の評価項目に課題があるのではないかと考えている。先に挙げたような一般的な学術論文の評価項目の考え方をたどっていくと、デカルト（1596-1650）の二元論に行き着くことがしばしば指摘されている。精神と物体を独立した実態として区別する考え方は、18世紀以降の測定・観測技術の発達によって、様々なモノを観察、実験することで精緻なデータをえることができ、物質世界を機械論的に説明することが可能になった。ここで、デカルトが生きた17世紀には様々な合理性の考え方が提案されていたことは國分が指摘している通りである¹⁾。そのなかでもスピノザ（1632-1677）は、コナトゥスという概念を通じて躍動性を存在の本質として捉えた。コナトゥス（努力・衝動）は単なる生存本能ではなく、自己の本質を最大限に発揮するような力で、この力が強化されると、より自由で充実した状態へと躍動することができる。ベルクソン（1859-1941）も「生の躍動」という概念を提唱し、生命は単なる機械的な因果関係ではなく、創造的進化を遂げる力を持つとした。両者とも生命を静的な存在ではなく、自己を発展させる動的な力として捉えている点で共通している。

このような発想にもとづけば、地域実践の持つ開放性により、教育的、研究的な実践をエンカレッジする観点から「躍動性」を評価項目に用いることはふさわしいと考えることができよう。どのような地域実践の論文が躍動性をもつかについては、まだ議論の余地はあるが、『地域実践研究』では、「いきいきとした実践活動が描写されている」「実践活動の描写にワクワクする」「描かれている実践内容に触発され、読者の地域や分野でも実践したくなる」「自分なりに工夫を加えて実践してみたいくなる」と説明している。こうした新たな評価項目を採用している点に、『地域実践研究』の学術雑誌としての挑戦がある。

3. 『地域実践研究』の課題とこれから

『地域実践研究』は、既存の学術領域で採用されてきたような学術的な新規性に主たる関心を示す「学術実践研究部門」と実践活動の躍動性に主たる関心を示す「教育・地域実践研究部門」の二つの部門を設けている。これは地域実践研究の裾野を広げるために両方のアプローチを包含していく方針をとった。

これからの課題としては、教育・地域実践研究部門の「躍動性」について評価しうる査読者を増やしていくことがあげられる。投稿論文を読んでコナトゥスが拡張されたか（俗な表現を使えば、テンションがあがったか、やばいと思ったか）ということの感受性を査読者が持ちうるかということとなる。これについては、地域で教育活動、研究活動を行ってきた者であるならば、そのプロセスの中でそういった感覚は共有できるのではないかと考えている（信じている）。そういった観点からは、学術実践研究部門では主に新規性を判断しなければならないため、専門が異なる査読者が担当することは難しいかもしれないが、教育・地域実践研究部門に投稿された論文は、専門分野が異なっても地域での実践経験があれば査読者として十分な資格を有していると考えられる。むしろ、異なる専門分野であるほど躍動性に敏感になるとも考えられ、査読者として適しているともいえるかもしれない。

また、投稿論文の本数を確保していくことも重要であろう。様々な専門分野の論文が掲載されることによって、実践の多様性が担保され、地域実践による地域課題の新たなアプローチが生み出されていく。そのためには、学部で区切るのではなく、さまざまな学部やセンターで地域実践を行っている主体に論文投稿を呼びかけていく必要もあろう。

こうした努力を積み重ねていくことによって、『地域実践研究』にはワクワクするような実践研究が蓄積されていくであろう。その結果、大学の研究者のみならず、実践者にも読んでいただけるようなジャーナルに育ち、その読者によって実践知が地域にフィードバックされ、各地で躍動する研究者、学生、実践者によって、よりよい地域を実現していく助けになればと思っている。

【参考文献】

- 1) 國分功一郎（2022年）, 「スピノザ」, 岩波新書

On the Occasion of the Publication of “Regional Practical Research

Nobuhiko MATSUMURA

As the birthrate declines and the population ages, the sustainability of local communities is becoming an issue. In particular, depopulation and economic decline are becoming more serious in rural areas, and the importance of local practices in which local residents and diverse entities work together is increasing. Local practices require flexible responses and trial and error from a pragmatism perspective. In order to evaluate research on local practices, it is necessary to incorporate new dynamism. In order to develop “Local Practice Research”, it is necessary to increase the number of reviewers who can evaluate dynamism and to publish papers from diverse fields.